

## 第6話

## 週刊

## タバコの正体

タバコは喫煙者自身の体にダメージを与えるだけではなく、その煙は周りの人たちの健康にも悪影響を与えます。このことは繰り返し伝えてきましたので、「知ってるよ、それって“受動喫煙”って言うんやろ」と心のなかでつぶやいてくれている人もいると思います。

そこで、ちょっと復習してみましょう。喫煙者が直接吸いこむ煙を“主流煙”、タバコの先から立ち上る煙を“副流煙”と言います。両方の煙の成分を調べると、ニコチン、カドミウム、一酸化炭素、アンモニア、ホルムアルデヒドなどの有毒物質は、どれも副流煙の方が多く含まれているのです。この事も、以前紹介しましたので、覚えてくれている人がいればうれしいのですが。

だから、喫煙者が所かまわずタバコに火をつければ、その毒をあたり一面に撒き散らす事になり、多くの関係のない人が無理やり「毒を吸わされる」事態となるのです。こんな事がいたるところで起こっているとしたら、非常にまずいですよね。

でも、現実にはこんな事態が多くの飲食店で発生しています。店内のテーブルには灰皿が置いてある所が多く、「タバコを吸って、ゆっくり食事を楽しんで下さい。」というのが、ずーっと昔から飲食店経営の常識だったからです。

タバコの事を学んでいる君たちにとって、こんな常識はどうてい納得できないだろうと思います。だって、なんの言われもない健康な人たちが、喫煙者が吸い込む煙よりも有害な副流煙を無理やり吸わされながら、食事をしなければならないのですからね。

さいわい最近、そんな理不尽を改める動きが出始めているので、全面禁煙の飲食店も増えているのと同時に、タバコを吸う席と吸わない席を分ける“分煙”の所も目立つようになってきました。ところが、この“分煙”という対策は効果があるようで、実はタバコの害をなくせないのを知っていますか。

そもそも、タバコの煙は空気の流れとともに、どこへでも漏れていきます。濃度の差はあっても、20mや30mの距離ではニオイは必ず漂ってきます。ましてや屋内となると、部屋じゅうの空気にタバコの成分がいきわたってしまいます。つまり、密閉した間仕切りのない同じ空間を“喫煙場所”と“禁煙場所”に分けても、ほとんど効果はありません。それに、空調設備がある建物では、ビル内の配管を伝わってどの部屋にも煙やニオイが運ばれてしまう場合もあります。だから和工本館のトイレでタバコを吸うと他の階にまでニオイが漂うのです。姿を隠して煙を撒き散らすなんて、まったく迷惑な話です。

ともあれ禁煙や分煙の方法に関係なく、なんの言われもない人が、タバコの害に遭遇せずに暮らせる世の中にしなくてははいけませんよね。そのために、これから大人になる君たちがタバコを吸い始めない事が重要です。そうすれば、いつの日か、タバコの害のない世の中を実現できるはずですよ。